

# バロウズ書簡一訳および註

若山晴子 石川晴子

## 序

本稿で取り扱う書簡は、既に発表したタルカット書簡<sup>1</sup>及びダッドレー書簡<sup>2</sup>と同じく、草創期の神戸女学院に関わる米国伝道会「宣教師文書<sup>3</sup>」の一部である。ダッドレー女史の従妹にあたるバロウズ女史は、その従姉の勧めを受けて米国伝道会の召命に応じ、1876年来日した。爾来1880年秋まで、タルカット、ダッドレー両女史と共に、神戸の「女学校」（現神戸女学院）に在ってこの寄宿学校の運営に協力している。ここにおさめた1875年9月から1880年1月までの10通の書簡<sup>4</sup>は、女史が日本赴任受諾を決意して来日の準備にいそしむ様子や日本での活動の実を伝えたのち、1880年に至り、転地先の横浜で過労の身をいたわりつつ、伝道活動の来し方行く末を省察摸索している様を窺わせて終わる。女史はその後、ダッドレー女史と共に「女学校」を離れて市井の婦人のための活動に専心し<sup>5</sup>、神戸女子神学校（聖和大学の源流）の創立に参画することになるが、このあたりにもまた、『神戸女学院百年史 総説』において言及された如き、初期宣教師たちの直面した教育と伝道の二元性の問題<sup>6</sup>が作用しているのを見過ごすわけにはゆかない。

本稿のテキストの取り扱い方はおおむね、「タルカット書簡一訳および註(-)」の序<sup>7</sup>に述べられたところに準じている。但し本書簡を活字化するには、ごく初めの部分を除き、ギーゼンタナー女史<sup>8</sup>の神戸女学院在任期間中にあたっていたため、まず女史が母国語としての英文慣例に基づいて解説を進め、のちに若山が手稿の字画形象に厳重注意して検討修正を加え、更に訳出に際して石川（本学非常勤講師）がこれを確認するという手順を踏んだ。

本稿は全て石川、若山二人の共同作業によるものであるが、敢えて分担を明らかにすれば、訳については石川が、註については若山が、各々その責めを負うものとする。

なお、マイクロフィルムにおさめられたこれらの史料の写真コピーを御提供下さり、更に、不明瞭な部分の再検討や註記に際しての他の書簡との照合等をも快くお許し下さった関西学院大学川村大膳教授に、心から感謝申し上げる次第である。

## 凡 例

- ☆ 書簡左肩の号数は、米国伝道会（American Board of Commissioners for Foreign Missions）本部における整理番号である。発信人の書簡の数とは関係がない。
- ☆ American Board of Commissioners for Foreign Missions は通例 A. B. C. F. M. と略称される。本文中では米国伝道会と訳した。但し書簡文中では簡略に Board あるいは

Mission Board と記されていることが多い。Board は単に伝道会と訳出した。なお同じ文中に伝道団とあるのは mission の訳で、現地の宣教師団を指す。

- ☆ 米国伝道会年次報告 (Annual Report of the A. B. C. F. M.) の略号として A. R. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の月刊機関誌 Missionary Herald の略号として M. H. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の共働機関である婦人伝道会 (Woman's Board of Mission) の月刊機関誌 Life and Light for Woman の略号として L. L. を用いる。
- ☆ 米国伝道会日本伝道団発行の機関誌 Japan Mission News の略号として J. M. N. を用いる。
- ☆ 既出の、タルカット書簡、ダッドレー書簡をおさめた「神戸女学院大学論集」第24巻第3号、第25巻第3号、第28巻第3号、第29巻第1号については、それぞれ、「論集」XXIV-3、「論集」XXV-3、「論集」XXVIII-3、「論集」XXIX-1 と略記する。
- ☆ 訳出の際補足した語は〔 〕に入れた。
- ☆ 書簡原文解説の際の判読困難の部分は、〔.....〕で示し、註をつけて説明した。また、一応解説したつもりであるが場合によっては検討の余地もあるかもしれないという語句には特別な符号をつけず、番号のみを附して註に加えた。

## バロウズ書簡<sup>9</sup>

1875年9月20日<sup>10</sup>～1880年1月23日

### 訳

第1号<sup>11</sup>

ミドルベリイ<sup>12</sup>

1875年11月12日

N. G. クラーク博士様<sup>13</sup>

拝啓<sup>14</sup>

およそ2カ月前に、日本にあってダッドレー女史<sup>15</sup>をお助けするようにと、書面にて御要請をいただきました。その折りには確答申し上げかねました。以前にもある期間〔考えてはおりましたが〕、あれ以来この問題は片時も脳裡を離れません。

神の御意志に尋ね、また友人たちに相談いたしました結果、そちらに私をお遣わし下さるお気持がありますならば参りましょうと、申し上げられる心境になりました。

仕事と私自身の力の至らなさを考えますと身の<sup>すく</sup>嫌む思いでございますが、主がお召しになる時には、必ず必要な助けを下さるであろうと思います。それ故、心からの喜びをもって自らの意志でこの仕事に全力を尽くす所存でございます。

お返事をお待ちしております。

敬具〔衷心より〕<sup>16</sup>

マーサ・J. パロウズ

ヴァーモント州<sup>17</sup> ミドルベリイ

一本部着 11月16日一

第2号<sup>18</sup>

ヴァーモント州<sup>19</sup>

ミドルベリイ

1875年9月20日

N. G. クラーク博士様

拝啓<sup>20</sup>

お手紙、今夜拝受いたしました。

この何年間か、伝道活動について深く思いを致しておりましたこと、また、私がそれに加えていただけるだけの力を備えているとお考えいただけたらと願っておりましたことは、真実でございます。けれども当地におきましても心に掛かることがございますし、その上、自らが相応しい者であろうかという不安が募ってまいりまして、私は適任ではないという気持になっておりました。

ところが、この1,2年、ダッドレー女史より日本での活動について度々お便りをいただきましてからは、その仕事に私も加えていただくことを切に願うようになりました。

この五月に、思いきってダッドレー女史に手紙を書き、先ずは、私が必要とされるや否やをお尋ねいたしました。何分にもどのようによれば<sup>21</sup>行くことができるのかもわかりませんでしたので<sup>22</sup>。ただ、神がお召し下さるならば道も整えられるであろうことは確信しておりました。

一週間後にいただきました返信によりますと、あちらの方々の御希望は、私の願っておりますとおりのものでございました。

只今は、誠心誠意この問題を考えまして、正しい決定に導かれますよう切に念じております。

私が行くことになりましたれば、友人たちも私自身と同じくらいの犠牲を払うことになりました

ようから、友人たちにも私と同様に決断してもらい必要があると思われま<sup>23</sup>。事態がそれほど確定的なものとは思われませんでしたので、ダッドレー女史の返信を受け取るまでは、友人にもこの話は控えておりました。

2, 3週間後には、はっきりした返事を差し上げられると思います。

敬具〔衷心より〕

マーサ・J. パロウズ

一本部着 9月22日—

第3号

ヴァーモント州

ミドルベリイ

1876年1月6日

N. G. クラーク博士様

拝啓

書類と為替手形を頂戴いたしました。感謝しております。

更に幾つかお尋ねしたいことがございますので、御教示いただけますと幸いに存じます。旅仕度に関する御指摘は参考になりますが、私自身にそれがどの程度あてはまるのかははっきりいたしません。私の居室の調度を整えた上なお、家政管理のために何かを携えてゆくのが望ましいでしょうか。勿論こちらから重い物を運んではゆきません。サンフランシスコでの買い物をあてにしております。クッションや寝具、本を数冊、何枚かの写真等を持ってまいりますので、衣服用のトランクに加えて荷造りトランクか箱が要るのではないかと思います。荷物は普通貨物便で送るべきでしょうか？ 箱の場合には、御指示どおりに、ブリキの内張りのあるもの<sup>24</sup>にするべきでしょうか？

ボストンへ赴くことにつきましては、先生が最善と思われるようにいたしたいと思えます。西部へは二月の第2週早々に参りたいと存じます。そうすればシカゴでレヴィット氏御夫妻<sup>25</sup>にも多分お目にかかれますでしょうし、イリノイのダッドレー女史の御友人にもお会いして、それからアイオワの姉<sup>26</sup>の所で2, 3日滞在できます。この予定が最善と思われましたら、早目に当地を発ちましてボストンに参りますのを、望ましいとお考えいただきたいと思えます。

ボストンから品物が届きましたら（多分そうなるでしょうが）、支払いはこちらでいたしましょうか？ それとも請求書をそちらに送ってもらうよう手配いたしましょうか？ この方が交換の手間が省けるのではとも思えます。

普通貨物便で送りますには、どう表示すれば<sup>27</sup> よろしいのでしょうか？ 便覧にありますパスポートに関する指示は私にもあてはまりますでしょうか？

あれこれほかにも多くの事がございますが、より高次の、非常に大切な<sup>28</sup> 準備のことを忘れていたのではございません。毎日そのために努めております。

敬具〔衷心より〕

M. J. パロウズ

—本部着 1月8日—

第4号

ミドルベリイ

1876年1月13日

クラーク博士様

拝啓

今晚ジョーダン [……]<sup>29</sup> に荷物の目録を送りましたが、支払いに足りるだけの持ち合わせが手許にありますかどうか心配しております。請求書が届きましたら払えますように、折返し幾らか御送金願えませんでしょうか？ このお金を用いますのは、私には何ともしっくりいたしません。できますならば、自分の仕度は自分で整えたかったという気持ちが強うございます。この前の手紙に認めましたボストン行きおよびその他の件につきまして、御意見をお聞かせ下さいませ。準備期間がとても短いように思いますが、それでもできるだけいそいで仕事<sup>30</sup> をしております。

敬具〔衷心より〕

マーサ・J. パロウズ

—本部着 1月15日—

第5号<sup>31</sup>

ミドルベリー

1876年1月18日

N. G. クラーク博士様

拝啓

昨日、50ドルの小切手同封の貴信頂戴いたしました。私が当地を発ちます前に更に75ドル<sup>32</sup>必要とする旨申し上げましても、どうか無駄遣いをするとはお考えにならないで下さいませ。先で心配しないで済みますように、必要な予備の衣類を全て、当地で整えておく方がよいように思われます。

昨夜の会合には出席できませんでしたが、皆様が私のためにお祈り下さったことを知り、とても慰められております。

[.....]<sup>33</sup>氏に書面で、7日月曜日にボストンに行き、そこに一日滞在してからシカゴに向かいたい旨、お知らせしておきました。ひとりで旅をいたしますよりは、レヴィット氏御夫妻とご一緒できる方が望ましいのですが、そういたしますと、そちらで私の友人に会う時間がなくなってしまいます。

今夕、箱の荷造りをいたしました<sup>34</sup>。明日送り出すつもりでございます。これは御指示いただきましたようにボストン宛てに発送いたします。

私には、未だ先の見通しをたてることができません。けれども、然るべき時が来れば、それもできるであろうことは何ら疑ってはおりません。

敬具〔衷心より〕

M. J. バロウズ

追伸。

サンフランシスコでは、私共はどこに<sup>35</sup>泊まることになりますか、お教えいただけますでしょうか？ その近辺に友人がおりますので、どこで<sup>36</sup>落ち合えばよいのか知らせたいと思います。

第6号<sup>37</sup>

ミドルベリー

1876年1月22日<sup>38</sup>

N. G. クラーク博士様

拝啓

20日附のお手紙いただきました。50ドルの小切手を御同封下さいました由お書きですが、小

切手が入っておりませんでした。何かの手違いがあったものと推察いたします。

ボストンには、到着いたしました時〔……〕<sup>39</sup>知り合いはひとりもございません。町を訪れますのも初めてでございますので、いろいろお教えいただければ幸いに存じます。私は多分ひとりで行くことになりましょう。

サンフランシスコには、必要な準備を整えるに足る期間だけ滞在すればよろしいかと存じます。ダッドレー女史が、家具をあちらで調達するようにと勧めて下さいました。できるだけ多くの時間をシカゴで過ごしたいと思っておりますが、他の方々とシカゴから御一緒できれば一とも思います。

ボストンでレヴィット氏にお目にかかれることになると、御一緒に、旅行の最後の行程を決めることができますよう。

敬具〔真心をこめて〕<sup>40</sup>

M. J. バロウズ

第7号<sup>41</sup>

ミドルベリー

1876年1月31日

親愛なるクラーク先生<sup>42</sup>

26日附のお手紙拝受いたしました。

そちらに夜遅くお伺いして御迷惑をおかけすることのないようにいたします。前に御示唆下さいましたように、どこか適当な滞在場所の名前をお教えいただきましたら、私ひとりで充分やってゆけると思います。先生には一度お目にかかって握手していただいたことがございますから、決してお見それすることはございません。

どうやら準備が整ったような気持ちがしてまいりました。一步一步助けられて道を進んでまいりました。おかげさまで心身共に快調でございます。私をお選びいただいた仕事に、大いなる希望をもってあたりたいと思っております。

御配慮に心より感謝申し上げます。

敬具〔真心をこめて〕<sup>43</sup>

M. J. バロウズ

1876年8月7日

N. G. クラーク博士様

親愛なる友へ<sup>45</sup>

故郷を発ちましてから今日で6カ月になります<sup>46</sup>。当地に参りまして私がどれほど満足しておりますことかを御報告申し上げ、また、私をお遣わし下さったことを感謝申し上げずにはいられません。私がこちらに参りますについて、何らかの犠牲が払われましたとはいえ、私は微塵も後悔いたしておりません。それを補って余りあるものがございます。

母と姉妹を故国に残しておりますが（神が彼女たちをお守り下さいますでしょう）、私は、地上のいずれの土地にもましてこの地で、私の生涯の仕事をやり遂げたいと思っております<sup>47</sup>。故国における神のための活動がそれほど軽く見える<sup>48</sup> というのではなく、こちらでの要求がそれほど大きいということがございます。日本に向かって神の時〔の熟していること〕がそれほど明白なのでございます。それを目の当たりにするだけでも幸いでございますが、私自身がその仕事に間もなく携わることができるという希望がありますのは、本当にうれしいことでございます。

2週間前、ダッドレー女史と私は三田<sup>49</sup> で主日を過ごしました。話にはよく聞いていたのですが、訪れるのは初めてでございました。小さな教会は、建ってちょうど一年になります<sup>50</sup>。その成長ぶりは、ただ素晴らしいの一語につきまします<sup>51</sup>。たしかにこれは神御自身の聖業<sup>みわざ</sup>でございます。小さな礼拝堂にいっぱいの人が集まっておりまして、その人々の顔は見ておりまして心楽しいものでございました。私の従姉は、一人ひとりの名前を知っているらしく、各々に適切な言葉をかけていました。既に教会堂を建てる計画が進められています<sup>52</sup>。

昨日〔……〕<sup>53</sup>、神戸の教会に9人の新入会員が迎えられました。

夕方<sup>54</sup>、活動に着手して一年に充たない兵庫で、教会の設立式に列席できましたことは、格別の恩恵でございます。16名の会員のうち3名が神戸教会から転会してまいりました。残る10名の女子と3名の男子が洗礼を受けました。それは感動的な光景でございました。詳細は、目と同様に舌と耳とを働かすことのできる方々にお委せすることにいたします。

私は従姉と共に2、3度そこを訪れておりましたので、今では皆と顔馴染みになって、自由にあやつれるわずかな言葉を役立てております。最初の夏は過労を避けるようにと何回となく御注意を受けておりますので、「ゆっくり急いで」日本語を学んでおります<sup>55</sup>が、どうしても話したいという思いにかられ、時には身を切られるほど辛いことがございます。

十日ばかり有馬で過ごしてまいりました。山々が私の故郷のヴァーモントの丘を思い出させてくれました。本当に安らかな日々でございました。

目下私が「ホーム」の監督にあたっております。タルカット女史<sup>56</sup>とダッドレー女史とが、当然にしてしかも余儀なき休養をとっていらっしゃるからでございます<sup>57</sup>。



最後に、是非ともお伝えしなければならぬことがございます。私の〔日本語の〕先生のこととございますが、この方は頑なな仏教徒でしたのに、熱心なクリスチャンになり、この真理を伝えることにこれからの一生をかけたたいと望んでおります。また<sup>58</sup>、私が英語を教えておりますひとりの青年は、祈りつつ、この真理について知るところを友人たちに伝えようと、数日前に故郷の島四国へ帰ってゆきました。この方たちに私がしてあげられることはほんの僅かでございますが、それでも、私がこれからしようとしておりますことを神がお許し下さる前兆であると思っております。

ダッドレー女史がよろしくとのこととございます。

お約束どおり、時にお手紙をいただきましたらと、心待ちにいたしております。

敬具〔衷心より〕

マッティ<sup>59</sup>・J. パロウズ

—本部着 9月5日—

第9号

日本、神戸

1877年12月6日<sup>60</sup>

親愛なるクラーク先生<sup>61</sup>

昨日で一週間になります。夜明け前に起きて、早朝に船に出迎えに参りました。私共は、カーティス氏御夫妻<sup>62</sup>と<sup>63</sup>新しく来られる姉妹<sup>64</sup>を歓迎しようとお待ちしていたのです。

新しく来られた方々にお目にかかるのが私共にとってどんなに大きな喜びであるかは御想像もつかないほどです。もとよりそれは、私共自身のためや活動のためばかりではなく、歓びと慰めとがその方々を待っていることを知っているからでもあります。クラークソン女史は、その心の半ば以上をその備わった力と共にトルコに送ってしまったのではないかという気がいたします<sup>65</sup>。あの方は御自分をこの地にお遣わしになった尊い手に早晚感謝なさることでしょうが、それを承知していなければ私共は、あの方のことを遺憾に思ったかもしれません。

女史はすぐさま本校の少女たちに熱心に話しかけました。あの方はそうせずにはいられないのです。私自身が始めるのに手間どったことを考えますと、この方がこんなに速く言葉の端々を聞きとって覚えてしまわれるのには驚きます。少しばかり英語を知っている少女たちとは、ごく簡単なことなら、既に通じあえます。

活動のためには、あの方がもっと丈夫であって下さればと思わぬものでもありません<sup>66</sup>が、女史が慎重に着手して下さるよう、私共も配慮に努めましょう。目下のところ、あの方にとっ

て一番必要なのは休息とこちらの事情に馴れることでございます。最初の数週間はどうしても疲れやすいものです。

私共は女史の来日と援助とを心から待ち望んでいたのです<sup>67</sup>が、あの方に激務に耐える準備ができるまでは、そういうものを押しつけないようにしたいと思っております<sup>68</sup>。

タルカット女史の御健康状態につきましては、随分御心配いただきましたが、全く憂慮すべき点がなかったわけではございませんでした<sup>69</sup>。けれども日毎に力をつけてこられまして、今は、いずれこれほど有力な助けを得られようとの見込み<sup>70</sup>がつかしましたこともあり、活動<sup>71</sup>に対して意欲を新たにしておられます。

学校の仕事に加えて外部からも常に仕事が次々としかかかってきますので、私共は、日本の寺院でよく見かけますような頭と手のいくつもある仏像のようだったらと考えてしまいます。

私の日本語の知識はまだまだ覚束なく、仕事を円滑に十分にやってゆくには至りませんが、ともかく、その端緒につき得ましたことを毎日感謝しております。勉学とホーム<sup>72</sup>にかかってまいります家内<sup>73</sup>の世話のほかには授業を少し手伝っておりますので、一日一日が短かすぎます。

ダッドレー女史が健康を回復されましたことは、私共にとって尽きぬ喜びの源でございます<sup>74</sup>。女史は、健康をとり戻すのに故国へ帰ることは必ずしも必要でないことを示す模範になったと考えていらっしゃる。今はまだお丈夫とはいえませんし、仕事をするにも慎重にしていたいただかなければなりません。病気の試煉から、少しは賢明に御自分の体力を考慮することを学ばれたものと思います。学校の仕事に戻られるのは最善とは思えません<sup>75</sup>。けれども、日曜日2回と週日に数回は兵庫に行かれますし、[.....]<sup>76</sup>明石 [.....]<sup>77</sup>に近い村々の一つに出かけられます。為すべきことがどこに参りましても十分でございます。耳を傾ける人々もおります。

先生を私共の気持のよいホームにお迎えすることができたらと願っております。布教地の中でこれほど楽しい所はほかにはないだろうと思います。

新しい建物<sup>78</sup>の建築は着々と進んでおります。来月の [.....]<sup>79</sup>には使用できるのではないかと考えております<sup>80</sup>。ここはもう手狭ですから、待ち遠しくてなりません。私共は一つ屋根の下に、現在、30人の少女たちと2人の助手をかかえております。そして更に入学を待っている人々がございます。

事実や数字の列挙は、この場の雰囲気をごく僅かに伝えるだけにすぎません。他の学校について書かれたもので読みましたり、私共がホリヨーク<sup>81</sup>でいつも体験しておりましたような、聖霊の力の際立った迸りは、未だ経験していません。とは申せ、少女たちは、私共の家族の一員になりました時からほとんど例外なく、クリスチャンとしての生き方を少しずつ身につけてまいります。それを見るのは喜ばしいことでございます。現在おります者<sup>82</sup>のうち、すでに11名が教会員でございます。6名が入会を希望しております。

只今のところ、私共は、自分たちが希望し期待しているほどには、自立してやってゆく基盤を確立しておりません<sup>83</sup>。けれども、目標に向かって、ゆっくりとではあっても着実に進んでゆくべきではないかと思っております。9月10日に終わりましたこの学年度の収支決算の写しをお送りいたします。私共がこの方面でどれほど多く（あるいはどれほど僅かばかり）前進し

たかがおわかりいただけるのではないのでしょうか。学校にとって最善と思われることをはずれない限り、経費を切りつめようと努めております。お金を必要としている所がほかにもありますこと、また、当地の人々に自らの重荷は自ら負うべきであると教えるのが更に必要でありますことは、十分理解しております。学校には、創立以来、金銭で経費を支払っていない者が何人かおります<sup>84</sup>。この人たちが私共の援助を必要としている理由にも納得できるところがございますし、また、〔今が〕この人たちがここを去るのに最善の時とも思われません。間もなく、学費を少し値上げしてもよろしいのではないかと考えております。

伝道会の負債が〔……〕<sup>85</sup>したことを読みまして<sup>86</sup>喜びに堪えません。私がヴァーモント州<sup>87</sup>の出身であることを嬉しくまた誇りに思いますのはこれが最初のことではございませんが。

私共、できるだけたびたび手紙を差し上げたいと思っておりますが、なかなかそうもまいりません。これは私共がそれ以外のことをしているからとお考え下さいますようお願いいたします。

奥様はじめ伝道会でお目にかかりました御友人の皆様に、どうぞよろしくお伝え下さいませ。とりわけ先生御自身への、心からなる敬愛の情をお受け下さいませ。アルバムのページを繰りますと、いつも、私の方を見まもって下さる先生のお顔に出会います。先生の借別のお言葉を、今もよく覚えております。

敬具〔真に真心より〕

M. J. パロウズ

#### 第10号<sup>88</sup>

##### 1877年度9月10日までの神戸学校収支決算

| 支出     |                          |
|--------|--------------------------|
| 食費     | 381.061ドル                |
| 必要物資   | 136.876ドル 薪、灯油、設備用具少々、他。 |
| 税金     | 25.487ドル                 |
| 使用人人件費 | 64.00ドル                  |
| 教師     | 163.50ドル                 |
| 修繕費    | 32.052ドル                 |
| 合計     | 802.976ドル                |

|          |         |            |
|----------|---------|------------|
| 収入       |         |            |
| 寄宿生学費    | 348.65  | ドル         |
| 通学生学費    | 108.57  | ドル         |
| 使用人食費    | 27.47   | ドル         |
| 教師食費     | 10.00   | ドル 年間の一部のみ |
| 学校基金     | 243.286 | ドル         |
| その他の財源より | 65.00   | ドル         |
| 合計       | 802.976 | ドル         |

—本部着1878年1月18日—

第11号

日本、横浜

1880年1月23日

親愛なるクラーク先生

これからの数日間、怠惰を余儀なくされて過ごします。その間に、ここ何か月も書こうと楽しみにしておりました手紙が何通か書けますなら、それも悪くないのではと考えております。

先生は、なぜ私が当地でこの手紙をしたため、また、なぜ怠惰の事を持ち出したのかと、御不審に思われることでしょう。

家と仕事から暫時放逐されることになって、誰よりも驚いておりますのは、ほかならぬ私でございます。

別に病気になったというわけではございません。ただ、変化と休養の必要を痛感いたしました。

実を申せば、この一年はいろいろな面で試煉の年でございます<sup>89</sup>。このホームや私共の周りの至る所で病気になる人が多く、そのため、当然のことながら、私共は皆心身共に過労に陥りました。そして夏休み前には皆が、常になく疲労困憊しているのを自覚するようになりました。私は、有馬のペリー博士<sup>90</sup>のお宅で、日頃の心配事からすっかり解放されて勉学と読書とに素晴らしい時を過ごしました。こうして、この休暇を何のお咎めもなく活用できたと思っておりました。九月には、仕事に対する新たな希望と目的をもって、神戸に戻りました。ですから、それから3カ月経って、神経系統に紛れもない過労の徴候が表われた時には、少なからず驚きました。頭<sup>91</sup>と手足が私のいうことをきかなくなりましたので、お医者様のお勧めに従って、数週間完全な休息をとろうと、賢明な判断をいたしました。けれども神戸は、そして特にホームは、そこで仕事の直中に在ります者にとって、決して休息のとれる場所ではございませ

ん。そこで、グリーン夫人<sup>92</sup>から親許に帰るつもりで休みにいらっしゃいというお誘いをいただきましたので、喜んでお受けすることにいたしました。こちらでは、お医者様もおっしゃって下さることだからと、煩わしいことから一切離れて、毎日ほとんど一日中戸外で過ごし、乗馬や散歩をしております。復帰できるのも間近いのではないかと思います。

当然のことではございますが、このような事態に至った原因を反省し、どうすればこれから先、その原因を回避できるかと思ひめぐらしております。けれども、これといって良い考えも浮かびません。ホームでは、家族<sup>93</sup>の世話が、いろいろな点で、他の家とは比較にならないほど大きいのです。

私たちには更に多くの仲間があります。しかも、病気の方々に保養所を提供するという点ではグリーン夫人とはりあっております<sup>94</sup>。ここが学校であることと私共の戸口が常に開かれていることのために、恐らくは伝道団内の他の家よりも、多くの日本人が訪れて来ます。それに、このような大家族の家計の心配は決して小さな問題ではありません。

外部の仕事から手を引くべきだと言われておりますが、私にそれができるとは思いません<sup>95</sup>。

十分に通じる語学力を備えた婦人宣教師であれば、周り中の戸口が開かれていて活動のための召命と機会とがありますのに、目をつむってられるものか、手をつかねてられるものか、疑わしいところです。ダッドレー女史と私は、新しく開拓される所のいずれかにホームを作って、そこで婦人たちの間での活動に専念することができたらという話をよくいたします<sup>96</sup>。もっとも、ホームでの私の役目を引き受けに来て下さる方がなければ、望むべくもないことではございますが。私は光を待ち望んでおります。

それまでは、運営に必要なことを身につけて、賢明に仕事をするよう努めます。

全き忍耐と慰めの神の御要請は、私共の周りに在ります人々の魂をいかに有効に結集させてキリストに導くかを、知ることではございます。この数週間の祈りが、私共一人びとりと教会とに、豊かな祝福をもたらさんことを、心より望んでおります。

深い敬愛の念をこめて—

「神のみ名において」

敬具〔衷心より〕

M. J. バロウズ

—本部着 2月19日—

註

1. 「論集」XXIV-3 及び XXV-3 に、女史の米国出立前の1872年12月3日から岡山転出が決定した後の1880年7月5日までの書簡計17通を、「タルカット書簡一訳および註」としておさめた。
2. 同じく「論集」XXVIII-3 及び XXIX-1 に、米国出立前の1872年12月24日から神戸ホーム（「女学校」の別称である。）退去直前の1880年8月30日までの書簡9通を、「ダッドレー書簡一訳および註」としておさめている。
3. 米国伝道会に属する現地伝道団の各宣教師からボストンの本部に宛てられた報告書簡である。オリジナル・テキストは現在ハーヴァード大学ホートン・ライブラリーに保管されている。
4. ここで扱った最後の書簡1880年1月23日附の書簡には11という整理番号がついているが、実際の書簡は10通をかぞえるのみである。これは、第9号に添附された1877年度の収支報告書を第10号として整理したことによるのではないかと思われる。
5. 1880年秋以降のことになる。このことについては1880年8月30日附ダッドレー書簡（「論集」XXIX-1, p. 43.）及びその註86 (ibid., p. 49.) 参照。
6. 『神戸女学院百年史 総説』第一章第二節 pp. 22—24。また、「タルカット書簡一訳および註(二)」の序文（「論集」XXV-3, p. 127.）, 本稿1880年1月23日附書簡参照。
7. ibid., XXIV-3, pp. 70—71.
8. Miss Marguerite Giezentanner. トルコの古都スミルナ（イズミール）における大学のライブラリアンとしての奉仕を終えて帰米の途上, 1971年4月から同年9月まで, 神戸女学院において図書館学を講じ, 傍ら宣教師文書の解説に尽力。
9. Martha Jane Barrows (1841—1925). 「論集」XXV-3, pp. 148—149, 及び XXVIII-3, p. 73. 参照。
10. パロウズ女史の米国伝道会宛ての第一信であるが, 整理番号は2となっている。
11. 日附の順で言えば, 第2号のあとにくるべきものである。
12. Middlebury.
13. Rev. N.G. Clark とある。米国伝道会の Corresponding secretaries の一人 Dr. Nathaniel George Clark (1825—1896) を指す。
14. Dear Sir とある。
15. Julia E. Dudley (1840—1906). 米国伝道会日本派遣婦人宣教師。来日1873年。神戸の「女学校」（現神戸女学院）, 神戸女子神学校（聖和大学の前身）の創立者の一人である。「論集」XXVIII-3 及び XXIX-1, 「ダッドレー書簡一訳および註」参照。
16. Yours very truly とある。
17. Vermont.
18. パロウズ女史の米国伝道会宛ての最初の手紙。前出1875年11月12日附に先立つ。
19. Vt. とある。
20. My Dear Sir.
21. how と書き, 下線を施している。
22. Giezentanner 女史は knowing と解したが, 形態上は not seeing の方が妥当。
23. the decision must に続く4文字の一語。r または s に始まり t に終わるものの如くであるため, 一応 rest と解した。
24. 行の変わり目で分かち書きされた一語あるいは二語。zinc-lined ととる。
25. 米国伝道会日本派遣宣教師 Rev. Horace H. Leavitt (1846—1920) とその夫人 Mary A. Leavitt (1853—1914). レヴィットは既に1873年に来日して大阪に在ったが, この頃は健康上の理由で一時帰国していた (M.H., 1876, January, p. 8.).
26. 手稿では単に a sister とされている。
27. 読みづらい書体であるが, marked と推断。

28. the higher preparation so much に続く一語。Giezentanner 女史は indeed とするが、字面からは modest あるいは needed と見る方が妥当のように思われる。ここでは意味の上から needed の方をとった。
29. Giezentanner 女史によれば Jordan & Henden. 但しこの Henden にあたる部分は行の変わり目で分かち書きされた一語乃至二語で、インクの色も薄く、なお判然としない。一語ならむしろ Hampden と読める。
30. 判読しにくい一語。一応 work と解する。
31. 本信の本部到着の日附は不明である。
32. いったん fifty と書き、線で消して seventy-five と書き直してある。
33. Giezentanner 女史は Mr. Paul と読んだが、頭文字のはじめの部分になお、一層薄い線が見え、これを考慮に入れて推量すると Mr. Ward ととれる。当時伝道会本部においては Langdon S. Ward なる人物が Treasurer を勤めていたことは知られているが Mr. Paul については未詳である。
34. この部分の主語は we になっている。
35. 形態上は where か when か見分けがつかない。
36. 前に同じ。Giezentanner 女史は先のを when あとのものを where と解しているが、筆跡は双方全く同じである。訳出にあたっては、状況のわかりやすさという点から、両者を where と読むことにした。
37. 本部到着の月日は不詳である。
38. Giezentanner 女史に従って22と読む。但し下一桁の文字は不明瞭で、確定的ではない。
39. no acquaintance in Boston to whom I should [.....] like going on my arrival..... とある。この書簡は左端がファイルに綴じこまれているため手稿の各行の冒頭部は全て、後続文字に依拠しての推断によるものであるが、[.....] の部分は字数が極めて少ないため判断しにくい。二、三文字から成る一語で、末尾は d, h, l もしくは t の如くである。
40. Sincerely yours.
41. 本部到着の月日は不詳である。
42. My dear Dr. Clark.
43. Yours Sincerely.
44. バロウズ女史日本着任後の第一信である。この書簡は M.H., 1876, November, pp. 379—380. にその一部分が転載されている。
45. My dear friend.
46. M.H., 1876, April, p. 141. には、バロウズ女史は、レヴィット夫妻及びスタークウェザー女史 (Miss Alice J. Starkweather) と共に同年3月1日にサンフランシスコを立ち日本に向かったとの記事がある。ここにおさめられた書簡中、米国立前最後のものが1月31日附であるところから、女史が2月早々に郷里を立ち、船出までの日々を、ボストン、シカゴの辺りを経めぐって、旅に過ごしたことが窺われる。なお J.M.N., 1910, February, pp. 114—115. には、バロウズ女史自身による当時の回顧が掲載されていて興味深い。
47. バロウズ女史のこの言挙げは見事に成就した。女史がようやく帰米を決意して神戸を離れたのは1924年11月11日のことであったが、永眠はそれから4ヶ月後の1925年3月13日、カリフォルニアのクレアモントにおいてであった。在日48年。83年の生涯の半ば以上をほとんどその最期の時まで、神戸とその周辺の伝道のために献げたものである。なお、前掲書、1924, November, pp. 41—42., 及び 1925, April, pp. 15—21. には、女史の帰米並びに帰天に際しての惜別の記事が見られるが、殊に帰米の折りのソール女史 (Susan A. Searle, 1858—1951. 神戸女学院第四代院長)の送別の辞の一節には妙味があるので、ここに引いてみたい。“.....To think of Miss Barrows as having gone to Heaven would not have seemed incongruous, but to think of her as still on this old earth and not living in Kobe is much more difficult.” (ibid., 1924, November, p. 41.)

また「神戸教會月報」にも大正13年11月20日から同15年4月20日にかけて折にふれて、女史を記念する項が見うけられる。

48. 文字面からは判読のむづかしい語であった。Giezentanner 女史は *lessen* と解釈したが、形態上は二語に見えるところから *seems less* と改めた。のちに M.H. に転載されたものと照合する機会を得、上記の確認をとった。
49. 三田伝道はダッドレー女史の活動の初穂である。—参照：タルカット書簡1874年5月16日附（「論集」XXIV-3, p. 82.）, ダッドレー書簡1874年6月20日附, 1876年3月20日附（*ibid.*, XXVIII-3, p. 66. 及び p. 68.）, M.H., 1875, September, pp. 265—266., 『神戸女学院百年史 各論』pp. 38—44., その他。
50. 三田の教会の設立は1875年7月27日のことであった（A.R., 1875, p. 58., 『日本組合基督教會史』pp. 27—30., 『三田市史』pp. 704—707.）。
51. 1876年3月20日附ダッドレー書簡（「論集」XXVIII-3, p. 68. 及びその註64（*ibid.*, p. 75.）併照。
52. この教会堂が完成を見るのは翌1877年9月7日である。明治10年9月14日附「七一雜報」は「三田會堂開業式の事」と題する記事をもってその日の祝典の様態を伝え、なお以下の如き記述をもってこれをしめくくっている。  
「……右の會堂は<sup>いづれの</sup>全たく三田公會の盡力にいづるものにして有志者の寄賦になりたる借金なしの會堂なり。其寄賦金は、二百二十圓四十二錢三田公會の信者、七十二圓五拾錢三田にある有志の者、十五圓<sup>の</sup>神戸公會信者の數名、七十圓九鬼公、九圓八拾錢神戸にある有志の者、百二十九圓五拾錢外國人より右<sup>あは</sup>合せて五百十八圓七十七錢なりといふ」
53. 判読困難。Giezentanner 女史は *evening* の省略形と解したかの如くであるが、A.M. のようにも見える。同じ日の夕刻兵庫の教会の設立式が執り行なわれたことを考えあわせると、*Eve.* と読むことは当を得ないのではあるまいか。この出来事については「七一雜報」明治9年8月11日附紙上に言及があるが、時刻は記されていない。
54. 読みづらいが、これは *Eve.* であろう。  
兵庫の教会の設立については、前掲「七一雜報」, M. H., 1876, November, pp. 377—378., A.R., 1876, p. 78. 参照。但し A.R. の記事に *in July* とあるのは誤記である。
55. I am “making haste slowly” in the language. とある。
56. Eliza Talcott (1836—1911). 1873年ダッドレー女史と共に日本に派遣された米国伝道会婦人宣教師。神戸女学院（当時は、「神戸の『女學校』あるいは『ホーム』と称せられた。の創立者、初代校長。1880年より岡山に新設の伝道区（station）に移り民間伝道に専念した。神戸に歿し同地春日野墓地に葬むられた。「論集」XXIV-3 及び XXV-3 所収「タルカット書簡一訳および註」参照。
57. この夏は二人共健康を害していた。タルカット女史は晩春頃から膝の故障に悩み、ダッドレー女史には、爾後一年に余る療養生活を余儀なくされることになる病の徴候が見えていた。—タルカット書簡1876年10月18日附（「論集」XXV-3, p. 131.）及びダッドレー書簡1877年1月1日附（*ibid.*, XXVIII-3, p. 69.）参照。
58. 用箋の端であることと筆跡のかすれとのため判然としないが、*and* と入っているようにも思われる。M.H. 転載分ではそのように取り扱われている（M.H., 1876, November, p. 380.）。
59. Mattie とある。パロウズ女史の愛称であった（J.M.N., 1925, April, p. 16. 参照）。
60. 版面の文字色が薄いため判読しにくかった。但し末尾欄外の受信側のメモからも、本便の発信年月日は1877年12月6日であることが確かめられた。
61. Dear Dr. Clark とある。
62. 米国伝道会日本派遣宣教師 William W. Curtis (1845—1913) とその夫人 Delia E. Curtis (1856—1880). 大阪で活動した。
63. 判読しにくい、記号 ; と、*and* の省略文字のように見えるので、仮にこう訳す。
64. やがて神戸の「女學校」第二代校長の任に就くクラークソン女史 (Virginia A. Clarkson,



- 1851—1940) のことである。クラークソン女史の来日については、M.H., 1878, February, p. 59. に、女史がカーティス夫妻と共に1877年11月3日にサンフランシスコを発ち、横浜経由で11月28日に神戸に着いたことが報じられている。また、1877年中のクラークソン書簡一特に12月20日附一(神戸女学院史料室発行『学院史料』Vol. I, 1983にて取り扱う。)参照。
65. クラークソン女史は海外伝道を志願した当初その赴任地としてひたすらトルコをもとめていた(クラークソン書簡1877年4月30日附, 8月17日附—*ibid.*)。
  66. クラークソン女史自身も自分がひ弱に見えることを大いに気にして、来日前からしきりに体調のことに言及しているが、来日直後の書簡の記述は、まさに、本便のこの部分と符合する。即ち、先輩宣教師たちに自分が虚弱だと思われはしないかと気に病みつつも、船旅に疲れたと述べ(1877年12月20日附), 来日直後に風邪をひき、またリウマチにも悩まされたと報じている(1878年2月14日附)。*—ibid.*
  67. 初期の宣教師たちが教育活動の内に伝道のための大いなる道を見とめ、学校の内外における伝道活動の二元的共栄を旨としていたことは、すでに見たとおりである(本稿註6)。しかしながら、こうした活動の渦中にあったタルカッタ女史をはじめとする婦人宣教師たちの心を夙に把えたのが、民間の、学問にはむしろ縁のない婦人たちの姿であったことも、すでにタルカッタ書簡取り扱いの際に明らかにされたことであった。来日後2年に満たぬ1874年12月、「もしお天道様を拝んではならないのでしたら、私共、何を拝めばいいのでしょうか?」と言いに来るような人々を前にして、「学校の重要性を無視するつもりはございませんが…家庭の婦人たちの間での活動が有望なものですから…」と告白せざるを得なくなった女史は、ついに1877年2月、はっきりと本部に対して、「学校を預かってくださる方」がほしいと申し入れる(『論集』XXIV-3, p. 85. 同, XXV-3, p. 137.)。クラークソン女史の日本赴任が決まったのは、その年の4月下旬のことであった。すでに健康上の理由により学校業務から手をひいたダッドレー女史、やがてこの二元的活動が生む緊張に疲弊しながら尚も学外の仕事から手をひくことはできないと言うバロウズ女史、神戸ホームのいずれにとっても、自分たちにかわって学校の少女たちの教育に専心してくれるであろう新来者の救援は、真に待ち望まれたものにほかならなかった。
- 但し、クラークソン女史の一途な性急さと、余りに過敏に見えるその心身の様態が、先輩宣教師たちにいささかならぬ危惧の念を生ぜしめたことは想像に難くなく、このことが、校務責任の委譲に関して、その時期あるいはその手順の上で様々の齟齬を招来したもようである。
68. これは先輩宣教師たちに共通の配慮であったが、クラークソン女史はむしろ活動への意気にはやり、待機の境涯をかこっていた。—タルカッタ書簡1878年3月29日附, ダッドレー書簡1878年2月14日附(以上『論集』XXV-3, p. 142. 及び XXIX-1, p. 36.), クラークソン書簡1878年2月21日附(『学院史料』Vol. I.), また「タルカッタ書簡一訳および註(二)」の註63(『論集』XXV-3, p. 152.) 併照。
  69. 具体的にどのようなことがあってクラーク博士を心配させたのか、手元の史料では測り難い。
  70. 学校業務におけるクラークソン女史の役割に対する期待か。
  71. Giezentanner 女史は the work と解説。しかしこの二語の真上にあたる行間に her strength と書き加えられたため、先の二語の形態は判然としなくなった。
  72. 非常に読みづらい書体である。Giezentanner 女史は my lot と読解したが、y のように下に伸びる文字の形は認め難い。また二語と見るにも無理がある。再検討の結果 Home と推断。「ホーム」は寄宿学校としてはじまったこの「女学校」の全体を指す通称でもあった。
  73. Giezentanner 女史によれば home. しかし house とも読める。
  74. ダッドレー女史は1876年の夏以来健康を害して静養を余儀なくされていた(タルカッタ書簡1876年10月18日附, 1877年2月6日附—論集 XXV-3, p. 131. 及び p. 137., ダッドレー書簡1877年1月1日附—*ibid.*, XXVIII-3, p. 69.) が、本便からほぼ2カ月後の1878年2月14日附のダッドレー書簡は、その回復の喜びを告げ、活動再開の抱負と実際とを力強く語って

- いる (ibid., XXIX-1, p.32.)。
75. これはダッドレー女史の主治医アダムズ博士の見解でもあった (ダッドレー書簡1878年2月14日附—ibid.)。
  76. and sometimes のように見えるが不詳。Giezentanner 女史によれば oftentimes であるが f の入る語とは見えない。
  77. one of the near villages [.....] Akashi となり, villages と Akashi との間の一語が判読困難である。on か。
  78. 1873年3月に完成する「第二校舎」のことである。
  79. 文字が薄れにじんでいるため判読困難。Giezentanner 女史によれば middle であるが、形態上やや無理があり、正確なところは不明である。
  80. Giezentanner 女史によれば we think.しかし we hope とも読める。
  81. Holyoke とある。パロウズ女史は Mount Holyoke Seminary の出身であった。
  82. number あるいは member.
  83. 布教地における、現地教会活動の財政的自立 (または自給主義— self-support) の問題に触れるくだりである。この年神戸の「女学校」は校舎増築のこともあって本部に特別支出を要請しているが、これを検討するにあたって、「二人の兄弟方は、もはや宣教師の俸給以外には何もものについても、外国のお金を求めることを潔しとなさいませんでした」とは、タルカット女史の述懐である (1877年8月7日附—「論集」XXV-3, p.139.)。布教地の伝道活動と教会の運営は現地において賄われ得るようになるべきこと—というのは、伝道活動の基本的な考え方であった。タルカット女史もこれを十分に弁えていることは、前掲の一文に続く言葉によっても明らかであるが、しかしなお、現状では当面の急務が実際の力を上まわっているとの判断に立っていた。パロウズ女史も、「自らの重荷は自らで負うべきであると教えることが必要」とは認めつつも、時未だ至らずと見ていることは、本便に見るとおりである。但しこの「自給主義」への対応の仕方は、宣教師牧師たちの間でも、かなり多様であった。タルカット書簡にある「二人の兄弟 (brethrens)」が誰であるかは未詳であるが、「徹底した自給主義の急尖峰」とうたわれているのは、当時大阪に在ったレヴィットである (『天上の友』第二篇, pp.154—155., 『日本組合基督教会史』p.73.)。1878年1月7日、レヴィットはその影響下にある大阪に、自立自営の「女学校」(のちの梅花女学校)の開校したことを誇りやかに報告している (M.H., 1878, April, p.118.)。当然のことながら、この学校の創立に盡瘁した澤山保羅は完璧な自給主義者であった (『天上の友』p.9.)が、一方、同じ日本人ではあれ、京都に在った新島 襄の立場はこれとは対蹠的であったという。(この項に関しては川村大膳教授の御示唆に与るところ大であった。)
  84. 1875/76年のアッキンソンの報告によれば、10名の寄宿生のうち3名の学費舎費を宣教師たちが負担しており、他に2名が助手を務めることによってその経費を埋めあわせていた (*History of Kobe College*, p.8.)。また、タルカット書簡は、1876年10月18日現在、寄宿生22名中3名が授業の手伝いをし、4名が課外時間にギューリック家で働き、5名がホームの家事に従事していると報じ、なお1877年2月6日には、28人の生徒のうちに、ギューリック家で養われている中国人少女2名、個々の宣教師たちから援助を受けている者6名、学校の内外で働いて経費の一部を自弁する者6名があったと伝えている (『論集』XXV-3, p.130. 及び p.136.)。
  85. 判読困難な書体で、ing に終わるさして長くない一語。of the debt of the Board と続く。その意味するところは、負債の軽減もしくは解除であることを、以下のパロウズ女史の口吻と、これに基づく我々の史料調査とから推断する。
  86. パロウズ女史の目に触れたものは、1877年度米国伝道会年次総会の報告であったと考える。この総会の模様は M.H., 1877, November 誌上にも詳しく報じられているが、その p.360 に “PAYMENT OF THE DEBT—Dr. Clark’s Paper” なる項目があり、以下のように記されている。

On motion of Hon. J. B. Page, of Vermont, after some discussion, it was voted to circulate cards through the assembly for immediate subscriptions to pay off the debt. This was done. ....

Before the close of the meeting it was announced that the whole amount needed to pay the debt of the Board —\$48,000— had been pledged! Upon this announcement, the Board united in singing “Praise God from whom all blessings blow,” and were led in a prayer of thanks giving and consecration by Rev. Moses Smith, of Michigan.

また同じく p. 367には次のような記事がある。

Hon. J. B. Page made statements in regard to what was done Wednesday evening to remove the debt, announcing that in addition to the sums then reported, pledges amounting to \$3,000 had since been received, making a total sum of \$51,000. ....

この案件の発議者がヴァーモントの人であったことにより、バロウズ女史が続けて、自分がこの州の出身であることを誇りに思う旨書き添えている理由も明らかにされ得ると考える次第である。

87. Green Mt. State とある。ヴァーモント州の別称である。
88. マイクロフィルムで検討しても、用箋の重なり具合が判然としないため、なお断定するには至っていないが、整理番号10はこのページの左肩に附されたものと考えるのが順当のようである。
89. 1879年の神戸ホームの状況は、本稿註67及び95との関連において眺められる必要がある。いかにして学校教育と民間伝道の仕事を分け、いつ、どのような手順で、タルカット女史の職責の一部（学校内の責任）をクラークソン女史に譲るか—の技術的側面の問題が、関係者たちの間に過度の緊張関係を生むことになったと了解されるからである。

のちにクラークソン女史は、「[1878年の間は] 英語を教えること以外に何の権限もなかった」と嘆じている（1880年8月30日附信）が、1879年の A.R. は「学校はクラークソン女史に委ねられている」旨報告するに至っている。但しこの前後の事情の詳細な陳述としては、1880年に入ってからクラークソン女史が、女史一流の切々たる口調で回顧弁明して書き送った、一連の書簡を示すことができれば、当時学内に在った人々の記述でこれに対置せしめ得るものとしては、バロウズ女史の本便の述懐を除けば、1879年10月7日附ダッドレー書簡しかない。ダッドレー女史はそこで、クラークソン女史の加減がよくないことを告げ、その原因は「力以上のことを為そうとするあの方の熱心」であると喝破している（「論集」XXIX-1, p. 41. —この時点では、バロウズ女史の不調を思わせる言辭は見受けられない）。実際、クラークソン女史は、事に当たってはやりがちなその性向に加えて、その教育観の上から、学校の内外の活動の二元性に固執するかに見える先輩たちの在り方が許容できず、このため、自他の別なく、かなりの緊張を負わせることになったもようである。
90. Dr. John Cutting Berry (1847—1936.)。米国伝道会派遣の医療宣教師。1872年来日、1893年帰米。医師としての才腕を伝道のために生かし、また監獄改革のためにも貢献した。
91. Giezentanner 女史によれば heart. しかし語尾を t とするには多少の無理が感じられる。むしろ head と解する。
92. 米国伝道会派遣宣教師の嚆矢 Daniel Crosby Greene (1843—1913)の夫人 Mary S. Greene (1845—1910)。1872年来日。神戸に伝道区を開いたグリーンが1874年、聖書翻訳事業への協力を請われて横浜に移ったため、米国伝道会日本伝道団の本拠ともいべき神戸を離れて働くことになった。夫妻共生涯を日本における伝道活動にかけ、日本で永眠している。
93. familyとある。「女學校」の内に寄宿する全ての宣教師及び生徒たちの集団である。
94. 判読しにくいのが、we (または and) vie with と解する。
95. ついに、教育と伝道の二元性の問題がはっきりと相克の形をとって立ち現われてきたことを示すくだりである。

これは、前記註67および89において言及された事情と併せて考察されねばならぬ事柄であ

って、神戸ホームの、教育の場としての性格と伝道の拠点としての機能との二元的在り方が問い直されるべき時の来ていることを示す。しかし実際は、すでに民間伝道的をしばったダッドレー女史は別としても、タルカット、バロウズ両女史共、クラークソン女史の態勢あるいは学内の人手の問題等を考慮に入れるが故に、この二元構造を支えて刻苦精励してきたもので、むしろ学外活動の方こそ本望というべきであった。一方これに対して、学校業務に対する使命感に熱えるクラークソン女史は、次のように論評している。

「原則として私は、学校業務にたずさわる婦人と女性〔のための〕活動にたずさわる婦人とが共に生活することがよいとは思っておりません。一たとえ一人ひとりの意図が最善でありましようとも一お互いが心から理解しあっていなければ、問題が起ります。」—1880年8月30日附クラークソン書簡参照。

96. すでに1878年2月14日附ダッドレー書簡の中に同趣の希望が開陳されていた(「論集」XXIX-1, p. 36.)。この希望は1880年秋に実現を見るが、1880年6月1日附でクラークソン女史は、これが実行に移されようとしていることを報じている。新しいホームでの新規の活動に対する決意と抱負とは、1880年8月30日附ダッドレー書簡において鮮烈である (ibid., p. 43.)。
97. With affectionate regards—"In His Name" Y.V.T. とある。

### 参 考 文 献

#### A.B.C.F.M. 宣教師文書

訳文：茂 義樹「D. C. グリーンの手紙」

——梅花短期大学紀要 第21号～第25号 (1972—1976)

Manuscripts: Letters of Miss M. J. Barrows (1875—1880)

Letters of Miss E. Talcott (1872—1880)

Letters of J. E. Dudley (1872—1880)

Letters of Miss V. A. Clarkson (1877—1880)

Letters of Mr. J. H. DeForest (1874—1880)

解説：川村大膳「アメリカン・ボード日本布教報告書の研究」——関西学院大学史学第5号 (1959), 及び関西学院大学共同研究紀要I『明治研究』(昭和42年3月)

Annual Report of the A.B.C.F.M.

Missionary Herald.

Woman's Board of Missions; Life and Light for Woman.

Japan Mission News.

七一雑報 (神戸雑報社, 明治8年創刊)

神戸開港三十年史・乾・坤 (神戸市役所編, 明治31年)

神戸教會月報 (明治32年創刊, 復刻・日本基督教団神戸教会, 1975)

日本組合基督教會教師會編『天上之友』(大正4年)

神戸教會略史 (神戸基督教會, 大正13年)

小崎弘道編『日本組合基督教會史』(日本組合基督教會本部, 大正13年)

日本組合基督教會教師會編『天上之友』第二篇 (昭和8年)

DeForest, Charlotte B., *The History of Kobe College*. (神戸女学院, 1950)

神戸女学院八十年史 (神戸女学院, 昭和30年)

小澤三郎『日本プロテスタント史研究』(東海大学出版会, 1964)

三田市史, 下巻 (三田市役所, 昭和40年)

日本基督教協議会文書事業部『キリスト教大事典』(教文館, 昭和50年)  
キリスト教大事典編集委員会

神戸女学院百年史 総説 (神戸女学院, 1976)

神戸女学院百年史 各論 (神戸女学院, 1981)